

筑波大学みどり散歩 No.3 ヤマボウシの仲間

2022年5月発行 筑波大学生命環境学群・生命地球科学研究群 文:上條隆志(筑波大学生命環境系)

筑波大学みどり散歩No.1、2では、学内のサクラを紹介しました。今回は、初夏のはじまりを感じさせる樹木であるヤマボウシとその仲間を紹介したいと思います。

ヤマボウシ

ヤマボウシ (山法師、*Cornus kousa* Buerger ex Hance subsp. *kousa*)

ヤマボウシは、そろそろ暑さを感じるようになる5月から咲き始め、春から夏へと移り変わりを感じさせる樹木です。その4枚の大きく白い“花びら”が樹冠全体を覆う様子が印象的です。学内では、北駐車場の個体が毎年多くの花を咲かせます。ヤマボウシの白い“花びら”と書きましたが、形態学的には、いわゆる“花びら”に相当する花弁ではありません。これは総苞(そうほう)という器官で、4枚の総苞が小さな花の集まりを取り囲んでいるのです。



ヤマボウシ、2020年5月12日、北駐車場



ヤマボウシの総苞と花序(花の集まり) (左)、花序(中央)、一つの花(右)、2020年5月12日、北駐車場

ヤマボウシの花は、4枚の総苞の中央部にある丸い塊となります。これは一つの花でなく、大きさ2-3 mmの花が集まっているものです。よく見ると、一つ一つの花は、4枚の花弁、4本のおしべを持っていることがわかります。葉の特徴としては、葉の裏面を見ると、葉脈のつけ根に毛が密生している点です。



ヤマボウシの葉(裏面)、2021年10月15日、遺伝子実験センター近く

秋に熟するヤマボウシの果実は、オレンジ色のサッカーボールのようです。果実が集まって一つの塊を作っています。この果実は、甘みがあり、食べることができます。



ヤマボウシの果実、2020年9月8日、北駐車場

観察ポイント：学内では、北駐車場、虹の広場と遺伝子実験センターの間などに植栽されています。また、主な分布域はブナなどと同じ冷温帯ですので、筑波山では、自生の個体も観察することができます。

ハナミズキ

ハナミズキ（花水木、アメリカヤマボウシ、*Cornus florida* L.）

ハナミズキは、ヤマボウシより早い、4月から咲き始めます。両種は、4枚の総苞が特徴的でよく似ています。一方、違いは、ハナミズキの総苞は先が尖るのではなく、折れ曲がった形で凹むことです。この総苞は紅色のものもあります。また、果実は赤く熟しますが、サッカーボールのような形にはなりません。北アメリカ原産で、公園や街路樹として、学内をはじめ広く植栽されています。



ハナミズキ、2020年4月16日、第3学群棟



ハナミズキ（花は未開）、2020年4月16日、第3学群棟（左）、2022年4月19日、遺伝子実験センター近く（右）



ハナミズキ（開花中）、2020年5月1日、総合研究棟A



ハナミズキの果実、2021年10月15日、総合研究棟A

ミズキ

ミズキ（水木、*Cornus controversa* Hemsl. var. *controversa*）

ミズキは、ヤマボウシと同じく、春から夏への移り変わりを感じさせる樹木です。ヤマボウシやハナミズキのような総苞はありませんが、一つ一つの花は、花弁が4枚、おしべが4本、めしべが1本と両種とそっくりです。伐採された跡地などに成立する二次林に見られるポピュラーな樹種ですが、学内では、それほど多くはありません。植物見本園には植栽されています。果実は黒く熟します。



ミズキの果実、2021年8月26日、植物見本園



ミズキ、2020年5月1日、植物見本園（上、左）

筑波大学みどり散歩のNo.3では、ヤマボウシの仲間を紹介しました。紹介したヤマボウシの仲間（ミズキ科の樹木）は、花や総苞の構造が、4枚、4本というのが印象的です。

参考文献

- 1) 大橋広好ほか（編）「日本の野生植物 第4巻」平凡社
- 2) 米倉浩司・梶田忠（2007-）「植物和名一学名インデックスYList」（YList），<http://ylist.info>（2022年5月3日）

*本文中の和名と学名は1)に従っています。なお、ハナミズキについては、2)では、アメリカヤマボウシ *Cynoxylon florida* (L.) Raf. ex Jackson、とされています。